

婚姻破綻と親子関係

～日韓の文学・映画・TVドラマにみる 主人公の苦悩を中心に～

星野澄子

目次

序説

I 婚姻破綻と子に対する母の愛との狭間で

- (1) 樋口一葉『十三夜』—婚家からの離縁を思い止まったお関
- (2) 童謡詩人・金子みすゞ—ふうちゃんへの愛と自死

II 子を遺棄した母が別の家族を形成したとき

- (1) 『誰も知らない』（日本映画）の4人の異父きょうだい
- (2) 『愛の群像』（韓国ドラマ）のカン・ジェホ兄妹

III 子の《出自を知る権利》ないし《験の父》に対する子の思い

- (1) 『冬のソナタ』（韓国ドラマ）のカン・ジュンサンとピアニストの母カン・ミヒ
- (2) A I D（非配偶者間人工授精）により生を受けた子ども
- (3) 窪島誠一郎『父への手紙』と作家・水上勉

結びに代えて

序説

海を舞台に生きる鯨やジュゴンなどを別とし、地上に棲息する哺乳動物は馬も牛も象も、母の胎内から生まれ落ち羊膜を拭われた直後から4本の

足で立ち上がろうと懸命に努力し、間もなく大地に立って自分の力で歩き、あるいは這うようにして、母の乳房にたどり着く。しかし人間の場合、新生児は歩くことはおろか、首もすわらない頼りない状態で生まれてくる。人類は脳を発達させた結果、高度な機能を持つ脳を内在させる頭部が大きく重く、それを支えるための首や体はいまだ未成熟のまままで出生⁽¹⁾に至るからである。

こうして人間の子どもだけが、親からひとり立ちし、自ら社会生活を送ることのできるさまざまな能力を身に付けるまで、およそ十数年の歳月、親を必要とする。言い換えれば、十数年の長い期間にわたって親の愛情を自分に貼り付けさせずにはおかない。それゆえに人間の子どもは自ら権利を行使できるまでの長期間、両親をはじめ祖父母および周囲の大人たちから《愛護育成される権利》⁽²⁾を持っているのである。同時に、その大前提として《出自を知る権利》を有しており、これら2つの権利は、生命体としての子の尊厳にかかわる権利であると言わなければならない。

本稿執筆中の9月11日、またも若い兄弟（4歳と3歳）が誘拐され川に投げ込まれて殺されるという、子ども受難の痛ましい事件が栃木県小山市で起きた。中学時代の後輩と先輩の間柄にある男性が婚姻破綻し、2人がそれぞれ2児を引き取っていた。父親同士とその子どもから成る2家族総勢6人の同居生活の中で、後輩にあたる容疑者（家の賃借名義人）が自分の家に同居してきた先輩に対する不満を募らせ彼の2児への虐待を繰り返した末、今回の事件に至ったと報道されている。また、容疑者に覚醒剤反応が検出されたとも伝えられている（のち、その容疑者に次いで兄弟の父も覚醒剤使用容疑で逮捕された）。

早い時期に児童虐待に気づいた近隣のコンビニ店長が7月8日に警察に通報しており、その時点から警察や児童相談所が事の重大性をきっちり受け止め適切に対応していれば、2人を救う機会は何度もあったと指摘する声

は多い。保育園で写され最後の写真となった2人のあどけない笑顔。現代日本ではこのような可愛い盛りの子どもたちが、家庭においても社会においても、自己を伸びやかに発達させてゆく居場所をもはや喪失してしまったのであろうか。また、婚姻破綻により上の男児を引き取り、下の2児を手放した母親はどのような事情の中でそういう選択をしたのであろう。報道されていないが、このことも気になる。

ここで近代的婚姻制度および近現代家族のありように眼を転じてみよう。1組の男女が出会い、愛情と信頼を基礎に同居ないし婚姻をし、2人の間に子どもが生まれて家族を形成する。近現代家族は、夫妻間の横軸の関係と親子間の縦軸の関係を併せ持っている。ところが、その横軸と縦軸とは互いに異質な動機と目的に根ざしている、という難問が横たわっていることを見落とすべきではない。

婚姻が、家柄と家柄との結合や相手の財産や地位・肩書きを自分の手中に収める目的で行われるような政略結婚や打算婚である場合は別として、純粹でひたむきな《愛情》が2人の結合の動機であればあるほど、結婚生活の継続は予測不可能なリスクをスタート時点から内在させている。《愛》は他の何ものにも換えがたい強いものであると同時に、もう1つの側面では移ろいやすく気まぐれで、いつ去ってゆくかもしれないはかない要素をも併せ持っているからである。「愛は4年で終わる」という学説を唱える人類学者の書⁽⁹⁾もある。

すなわち、妻と夫との間に対話もなく冷たい風が吹き抜け、横軸の関係はすでに破綻しているような場合、《愛》の純粹性を貫こうとすれば、離婚が最良の解決策となる。しかし親子関係のレベルに眼を転じてみると、子は人権の享有主体として成熟するまで親を必要とするがゆえに、縦軸の関係では、婚姻共同体の変わらない継続を求めるのである。仮に横軸の关系到優先性を持たせれば、大人たちは自分に合った最良のパートナーと出会

うまで結婚と離婚を積み重ね、子どもは親側の事情に付き合わされてシングル・ペアレントやステップ・ファミリーの中で育つことになる。他方、縦軸の関係を重視すれば、子どもは対話の成立しない両親の冷え切った関係やDV（ドメスティック・バイオレンス）などの暴力的な関係の中で育つ場合も出てくることになる。

横軸と縦軸—この調和しがたい2つを調和させるにはどのようにすればよいのだろうか。私たちは婚姻破綻に直面したとき、子どもの視点・立場に立って子どもの権利や利益を守るために、どのような英知を働かせればよいのか。

この問題を考察するために、本稿では主に文学・映画ないしTVドラマに描かれた主人公を通して、その苦悩や心のありようを見てゆきたいと思う。しかし、なかには実話を題材として構成された芸術作品や、社会の中で現在進行しつつある事実も含まれていることをお断りしておきたい。

なお、「婚姻破綻」という用語は、一度成立した法律婚が途中で破綻することを意味するが、本稿では婚約ないし親密な交際をしていた2人が、法律婚や事実婚に至らないままで破綻した場合も取り上げた。

I 婚姻破綻と子に対する母の愛との狭間で

明治から大正を経て昭和—桁生まれまでの女性たちの多くは、ひとたび結婚して子どもが生まれた以上、婚家でどんなに辛い仕打ちを受けても、夫との関係が支配・従属関係であったり冷え切った状態であっても、子どものために離婚をしてはならない、という縦軸の関係を最優先させる考え方を世代的に教え込まされてきた。

その背景として、全国一元的な制度として確立した1871年（明治4）戸籍法（壬申戸籍）、および1898年（明治31）に施行され第二次世界大戦の敗戦まで続いた男尊女卑の家父長的家族制度を根幹とする明治民法（民法

旧規定)が、妻や女性の身に重く押し掛かっていたという要素が大きい。

ここでは、ともに20代半ばで早世した、作家・樋口一葉(本名:奈津子、1872~1896)の文学作品、および童謡詩人・金子みすゞ(本名:テル、1903~1930)の詩と生涯を通してみてゆこう。

(1) 樋口一葉『十三夜』—婚家からの離縁を思い止まったお関

「(子に二度と会えなくなるという)同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け」。この台詞は、もはや婚家に留まることに耐えられない、夫・原田勇との関係に耐えられない、と一人息子の太郎を寝かし付けてそのまま婚家を飛び出してきた娘のお関に対して実家の父が諭した言葉である。樋口一葉著『十三夜』を初めて読んだとき、この箇所**に強いインパクトを受け、それ以来、忘れられない一節となった。**

明治民法において、妻は「無能力」規定(民法旧規定14条)をはじめ、さまざまな面で夫に従属する立場を強制された。親権者は原則として、父による単独親権であり(同877条1項)、離婚によって女性が婚家の家籍を離れば、その瞬間から子との関係は切れてしまうことになる。もっとも、一葉は壬申戸籍施行の年に生まれ、明治民法施行の2年前に他界しているのだが、すでに、その生存中の時期から戸籍制度を基軸として「家」制度は機能を開始していた、と見ることができる。

婚家を飛び出したお関は、生家の両親を前にして一気に胸の内を吐き出す。

「何といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も無く、稀々言はれるは此様な情ない詞をかけられて、夫れでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候と顔おし拭ぬぐって居る心か、我身ながら我身の辛棒がわかりませぬ、もう、もう私は良人も子も御座んせぬ嫁入せぬ昔しと思へば夫れまで、あの頑がんせはない太郎の寝顔を眺めながら置いて来るほどの心になりましたからは、最もう何どうでも勇の傍に居る事は出来ませぬ、親はなくとも子

は育つと言ひまするし、私の様な不運の母の手で育つよりまいははご継母御おなり、御手かけなりかな気に適ふた人に育て、貰ふたら、少しは父御ていごも可愛かわゆがって後々あの子の為にも成ませう、私はもう今宵かぎり何うしても帰る事は致しませぬ」⁽⁴⁾

お関は、「親はなくとも子は育つ」とまで言い放って、対話のない夫とは暮らしたくない心境を露わにする。それに対してお関の両親は次のように言い含めるのである。

「殊ことには是れほど身がらの相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋ふくろなどが口広い事は言へど亥之くちひろがあのさくこんの月給ありに有ついたも必竟ひっきやうは原田さんの口入れではなからうか、七光なひかりどころか十光とひかりもして間接よそながらの恩を着ぬとは言はれぬに愁うらからうとも一つは親おとの為弟おとの為、太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒ごがなるほどならば、是れから後とて出来ぬ事はあるまじ、離縁そちを取って出たが宜よいか、太郎は原田のもの、其方は斎藤そちの娘、一度縁が切れては二度と顔見そちにゆく事もなるまじ」⁽⁵⁾と。

お関と原田との結婚は、弟の亥之が就職面で便宜を図ってもらえるなど、お関の身内にさまざまな経済効果をもたらす2つの「家」同士の結合であったことが窺える。その後すぐに続く言葉が冒頭に示した台詞なのである。

「同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なあ関さうでは無いがてんか、合点がてんがいつたら何事も胸に納めて知らぬ顔に今夜は帰って、今まで通りつゝしんで世を送って呉れ、お前おとが口に出さんとて親も察おとする弟も察おとする、涙は各自てんでに分て泣かうぞと因果いんぐわを含めてこれも目めを拭ぬぐふて、阿関はわっと泣いて夫れでは離縁をといふたも我まゝで御座りました、成程太郎に別れて顔も見られぬ様になれば此世かひに居たとて甲斐かひもないものを、唯目の前くの苦くをのがれたとて何どうなる物で御座んせう、ほんに私さへ死んだ気どにならば三方四方波風たゞず、兎もあれ彼あの子も両親の手で育てられまするに、つまらぬ事を思よりひ寄あなたまして、貴君あなたにまで嫌いやな事を御聞まをしかせ申

ました、今宵限り関はなくなって魂一つが彼のの子の身を守るのと思ひますれば良人のつらく当る位百年も辛棒出来さうな事、よく御言葉も合点が行きました、もう此様な事は御聞かせ申ませぬほどに心配をして下さりますなとて拭うあとから又涙、母親は声たて、何といふ此娘は不仕合と又一しきり大泣きの雨」⁽⁵⁾。

お関は、子どもと引き裂かれるくらいなら死んだ気になって夫との関係に耐えぬこうと決意し、婚家へと戻ってゆく。この時代の女性たちが置かれた立場の普遍性を描いた作品と言えるだろう。

なお、一葉の『にごりえ』『大つごもり』『十三夜』を原作としたオムニバス映画『にごりえ』が、今井正監督、水木洋子・井手俊郎脚本により1953年に制作され、格調高い芸術作品となった。帰途お関（丹阿彌谷津子）は、乗った人力車の車夫が幼馴染みであった煙草屋の息子録之助と知り、思いがけない再会となるのだが、車夫を演じた芥川比呂志の演技が印象に残る。

(2) 童謡詩人・金子みすゞ—ふうちゃんへの愛と自死

金子みすゞは、1903年（明治36）に山口県長門市（現在）の仙崎に生まれた童謡詩人である。若いときから西條八十にその才能を評価されつつも、不幸な結婚生活の終焉とともに、1930年（昭和5）、自らその26年の生涯を閉じた⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

みすゞの生誕百年にあたる2003年に、長門市仙崎のみすゞが育った家に隣接して「金子みすゞ記念館」が設立された。今春（2004年3月）私は、みすゞの詩に潜む生命観の背景を知りたいという思いから、みすゞが育ち作品を生み出した地、および記念館を訪れた。

仙崎から青海島を仰ぎ見ることができる。この島は、かつて鯨捕りの島として栄えた。捕鯨を歌った詩、いわしの大漁を歌った詩、海のお魚はこ

の私に食べられてしまう、かわいそうと歌った詩⁽⁹⁾にも宇宙への広がりを持つ、みずゞ固有の生命観が溢れている。

お魚

海の魚はかわいそう。

お米は人につくられる、

牛は^{まきば}牧場で飼われてる、

鯉もお池で^ふ麩を^{もら}貰う。

けれども海のお魚は

なんにも世話にならないし、

いたずら一つしないのに

こうして私に食べられる。

ほんとに魚はかわいそう。

現在、「……させていただく」という用語が乱用過多と感じるほど、銀行やデパートと顧客との関係、編集者と大学教授との関係などで頻繁に使われている。しかし本来この用語は、命と命とが向き合い衝突せざるを得ない状況下で使われる言葉ではなかったのか。

生き物は自己の生を維持するために、他の生命を食料とせざるを得ない。それは、「あなたの命をいただきかせてください」という、祈りを込めた敬虔な気持ちをもって使うときの言葉であることを、かつて作家コ・サミヨン（高史明）氏の話から教えられた。鯨捕りの場合、捕獲した巨体の鯨を前にして「命をいただきかせてください。すべてを大切に使います」と祈り、肉だけでなく、骨も皮もひげも油も、粗末に捨てるものは何もない状態まで1頭の鯨の命を人間の生存のために「使わせていただいた」のであった。捕獲した鯨の胎内に胎児がいることもあり、仙崎にある鯨墓には、この世の中に生を受けることなく、母鯨とともに生命を閉じた70数体の胎児が祀られている場所もある。

みすゞの生涯を題材として、2001年にTVドラマと映画がそれぞれ作られた。

TBS創立50周年記念番組『明るいほうへ明るいほうへ—童謡詩人金子みすゞ』(TBSテレビ)では、松たか子がみすゞを演じた。映画の方は、『地雷を踏んだらサヨウナラ』の五十嵐匠監督により映画『みすゞ』が制作された。黒曜石のような瞳を持つ女優として、監督が田中美里をみすゞ役に抜擢した⁽¹⁰⁾。

映画は、みすゞの内面の苦悩や喜びを掘り下げるといっても1枚の絵画や写真芸術として成り立つような、場面ごとの構図の美しさに重点をおいて作られた作品であるように感じられた。むしろTVドラマのほうが、みすゞが置かれた時代的・家庭的環境の中で、心惹かれる人との仲を引き裂かれ、意に沿わない結婚を承諾せざるを得なかったみすゞの姿が表現されていたように思う。

不幸な結婚生活の中で、みすゞは一人娘のふさえを授かり、ふうちゃんへの豊かな愛をふくらませてゆく。しかし、遊郭通いにふける夫から花柳病をうつされ、体調を崩してしまう。娘をお風呂屋さんに連れてゆくこともできないので、近所に住む女性に連れて行ってほしい、と頼むシーンもTVドラマは描いていた。

みすゞには1歳年上の堅助と2歳年下の正祐(のち雅輔と表記)という兄弟がいた。父の急死に伴い、正祐は母の妹フジとその夫・上村松蔵夫妻のもとへ養子に出される。だが、松蔵は養子としての事実を明かさない。従姉弟として出会い、才能あふれるみすゞに心惹かれてゆく正祐。みすゞに松蔵が営む商店の手代格の男性との結婚話が進められたとき、事情を知らない正祐は苦しんだ。しかし、正祐は、徴兵検査の際に戸籍を見てはじめて自分が養子であり、その後みすゞとは実の姉と弟の間柄であることも知ることになる。正祐も《出自を知る権利》を長いあいだ閉ざされる立場に

置かれていた。

稀有な才能を持ち、愛する娘がありながら、なぜみすゞは自死を選んだのか。

1930年（昭和5）2月、みすゞは夫との離婚が成立した。離婚は、娘をみすゞが引き取る合意のもとに成立したはずであった。ところが、別れた夫から「やはりふさえがほしい」と手紙が来るようになり、ある日いつもの文面とは違う手紙で「3月10日に娘を連れにゆく」と連絡があった。親権は父親にしかない時代、連れに来られたら渡すしかない。次第に弱ってゆく自分の身体で、いま何ができるかをみすゞは考えた。

前日の3月9日、みすゞは1人で写真館へゆき、写真を撮った。帰りに桜餅を買って帰宅した。夕食後ふうちゃんをお風呂に入れてやり、自分と一緒に入れないので、たくさんの童謡を歌ってやっていたという。夜、2階の自室に上がろうとしたが、祖母と先に寝ていたふうちゃんの寝顔をのぞき込みしばらく動かなかった。「可愛い顔して寝とるね」—これが最後の言葉となった。身を以って元夫と運命に抵抗した覚悟の自死。3通の遺書の中には「ふうちゃんを母に預けてほしい」と元夫に宛てたものもあった。

「母が私を残したことがよかった。……母のいのちが私の娘につながった」と、祖母に育てられた娘のふさえさんは語っている。また、父については「商売上手の人。……悪い人ではないんですけど、放蕩者ではあったんですね。……昔は中継ぎといって本来の相続者が継ぐまでの間、他の人が家督を継いでおく……そのための結婚だったようです」と話し、「母の詩を読んで一番はじめに思ったのは、こういう目標を持っている人は、あの父とは合わないな」ということだった⁽¹⁾という。

娘の立場からみると、また違った父親像が浮かび上がってくるようだ。

Ⅱ 子を遺棄した母が別の家族を形成したとき

(1) 『誰も知らない』（日本映画）の4人の異父きょうだい

是枝裕和監督の『誰も知らない』⁽¹²⁾は、今年（2004）カンヌ映画祭に出品され、主人公を演じた柳楽優弥くんが史上最年少で最優秀男優賞に輝いた作品として、一躍話題を集めた。

これは1988年に実際に起きた「西巣鴨子ども置き去り事件」を題材に、是枝監督が15年前に脚本を書きあげたものであるという。しかし、現実の事件の中に含まれている残酷さ（当時、法律専門誌にこの事件の事実関係と論評がいくつか掲載された）とは切り離された別の視点で描かれている。それは、「生きているのは、おとなだけですか」というメッセージにほかならない。

ある日、池袋にあるアパートの2階に、福島けい子（YOU）と12歳の息子・明（柳楽優弥）が引っ越してくる。

大家さん夫妻への挨拶では、夫が海外へ単身赴任のため母と息子の2人で住むと説明していたのだが、実は明のほかに、妹2人、弟1人がいて、3人の妹弟を人目につかないようこっそり部屋に入れ、母と4人の子どもの生活が始まるのである。

父親がそれぞれ違う4人の子どもは出生届がされていないことから戸籍がなく、学校へ行くこともできない。買い物のために外出できるのは明だけで、あとの3人は家の中に居なければならない。それでも、夕方遅く母が仕事から戻ると、5人の食卓は楽しげだった。

ところがある日、ドーナツ店で母は明と向き合って座り、「恋人ができたの」と話した。「え？また？」と小声で呟く明に対し、「どうして私が幸せになってはいけないの」と駄々っ子のように言う。

秋になり、封筒に入った1万円札（多分十数枚）と明宛の置き手紙を残して、母は姿を消した。銀行のキャッシュコーナーで、家賃や光熱費を振

り込み、買い物をする明。

約束のクリスマスに母は戻らず、年があけてから帰宅した母は、慌しく旅行カバンに衣類などを詰めて家を出て行き、それっきり子どもたちのもとに帰ってはこなかった。

お金はどんどん減って行き、耐乏生活が続いているとき、事情を知ったコンビニの店員はそっと消費期限切れのおにぎりなどを分けてくれた。また、「警察とか、福祉事務所に相談したら？」とも声をかけてくれた。それに対し明は、「そうすると4人一緒に住めなくなるから」と答える。前に相談したところ兄妹が別々に引き離され、一緒になるまで大変だったことを経験しているのである。福祉行政が、子どもの望んでいることと乖離している一面を物語る。

ある日、母から現金書留が届く。差出人欄は「神奈川県川崎市中原区…福島けい子」となっている。明は公衆電話から104番をダイヤルし、電話番号を問い合わせる。NTTから教えられた電話番号に架けると、「はい、山本です」と女性の声。明らかに母親・けい子の特徴ある声だ。電話の背後には、子どもの声も混じった家族の声らしき音声が聞こえてくる。明は絶句し、何も言えずに公衆電話を切る。母に捨てられた！と明が感じた瞬間である（ただし、このような方法で電話番号を問い合わせられたとすれば、母が福島けい子名義でNTT発行の電話帳に登録しており、実生活では夫の姓の山本を名乗っていることになる。これはやや無理な設定ではなかろうか）。

今までは母が何日、何週間、いや数か月戻らなくても、仕事が片づいたら、あるいは、恋人としばらく一緒に過ごしてから、ふたたび母は必ず戻ってくると、希望をつなぐことができた。でも今はちがう。母は新しい、別の家族を形成してしまったのだ。自分たち4人の子どもを置き去りして……と、明は悟る。それ以降、子どもだけの生活は電気・水道などのライ

フラインが止まり、いっそう厳しい局面を迎えてゆく。

自分に命を与えた2人の親が揃っていないことそれ自体が、子どもにとってつらいことなのではない。自分たち子どもとは直接何の心のつながりもない見ず知らずの赤の他人が、母（ないし父）の恋人ないし新たなパートナーとして眼の前に現れ、親子の絆の間に入り込み、母（ないし父）から子どもが引き離されてしまうことの恐怖が、子どもの存在基盤そのものを脅かすほどの衝撃的な出来事なのである。

子どもと母の世帯に突然母の恋人が同居し、「自分になつかない」「嫉のため」などの理由で子どもが暴力を振るわれ、殺されてしまう事件が多発している。このようなデリケートな子どもの立場に対し、親たち・大人たちは十分な配慮をしなければならないだろう。

(2) 『愛の群像』(韓国ドラマ) のカン・ジェホ兄妹

『愛の群像 (True to Love)』⁽⁴³⁾ の主人公カン・ジェホ (ペ・ヨンジュン) は、夜は蟹の競り市で働き、昼は大学の経営学科に通う勤労学生である。愛を信じないでそれまで生きてきた彼は、同級生のチョ・ヒョンス (ユンソナ) を社長令嬢と知って、出世の手段として近づく。ヒョンスの目を自分に向かせることに成功するが、学期の途中から代用教員として心理学科所属の時間講師に着任したイ・シニョン (キム・ヘス) に次第に惹かれ、真実の愛情に目覚めてゆく。その意味で愛の葛藤を描いた作品である。とともに中庭で水道を共同使用する「長屋」に儉しく住む、チェホを取り巻く4家族の人物描写が生き活きとして素晴らしい。

自分の関知しないところで借金苦に巻き込まれるなど幾多の障害を乗り越えて必死に生きようとするチェホに、過酷な運命が襲いかかる。30歳前の若い身でありながら脳腫瘍の診断がくだされ、完治は難しいというのだ。ヒョンスとの婚約が破綻した後、チェホはシニョンの「私のために生きて

ほしい」という気持ちに支えられて次第に「生きたい」と思うようになり、辛い治療にも耐えてシニョンと結婚する。

かつてチェホが12歳、7つ年下の妹チェヨン（イ・ナヨン）が5歳のとき父が交通事故死し、その日をさかいに母は毎日泣き明かした。ある日、久しぶりに母に連れられて行った遊園地で置き去りにされ、以来「孤児」となってしまう。母の姉にあたる伯母チョン・ジンスク（キム・ヨンエ）の後を2人して追いかけて追いついて離れなかったため、チンスクはとうとう独身のまま2人を育てたのであった。

ここでも生みの母は、子どもを置き去りにした後に2人の娘を持つ男性と再婚し、別の家庭を築いていた。その事情を姉として知っているチンスクは、チェホ兄妹に母の消息を教えられないでいた。長いあいだ母を拒否し続けてきたチェホだったが、ようやく会いたい気持ちになり母との再会がかなったとき、チェホは脳腫瘍のためにすでに視力も聴力も失い、手のひらに書く文字で会話をする。

ある日、朝がきても、前の晩シニョンの隣で眠りに就いたチェホは目覚めなかった。シニョンの「私はチェホを起こさない」という静かな言葉が流れてドラマは終わる。

【注】韓国語には前後に来る文字や文字の位置により、発音に変化する法則がある。チェホ、チンスク、チュンサン、チヌなどの名を姓と併せて発音する場合、語中に来ることによりカン・ジェホ、チョン・ジンスク、カン・ジュンサン、キム・ジヌのように有声音化（濁音）を起こす。

Ⅲ 子の《出自を知る権利》ないし《醜の父》に対する子の思い

(1) 『冬のソナタ』（韓国ドラマ）のカン・ジュンサンとピアノ

ストの母カン・ミヒ

「冬ソナ現象」「ヨン様」「ヨンフルエンザ」という言葉が飛び交うほど、

多くの日本人の心をつかんだ『冬のソナタ』⁽¹⁴⁾の主題は、「初恋」と言われている。たしかに監督自身もそう語っていた。しかし、このドラマには一貫して問いかけているもう1つのテーマがある。それは、「子にとって父とは何か」という命題にほかならない。

主人公チョン・ユジン(チェ・ジウ)が通う^{チュンチョン}春川にある大学付属高校2年のクラスに、転校生が入学してきたところから物語は始まる。彼の名はカン・ジュンサン(ペ・ヨンジュン)で、ピアニストの母カン・ミヒ(ソン・オクスク)の出身校をわざわざ選んで入学してきた。その目的は父親捜し。高校時代の母と右隣に写っている人物の写真を携えていた。その写真の人は現在、同じ構内にある大学で数学の教授を務めるキム・ジヌ(チョン・ドンファン)であった。

息子のチュンサンが何度も「僕の父親は誰なの?」と聞いても、ミヒは「あなたの父親は死んだ」と言い続けた。子は、「父の姓と本を継いで、父の家に入籍する」(大韓国民民法781条)ことを正統とする、儒教道德の強い韓国でシングル・マザーとして子を生み育てることは、カン・ミヒにとって艱難辛苦の半生であったに違いない。この子は、私と婚約しておきながら別の女性(ユジンの母)を妻に選び自分のもとを去って行った、私の愛するチョン・ヒョンス(ユジンの亡き父)との間に授かった子、と思いつまなければ自分自身の生存を支えられないほどギリギリに追い詰められた心理状態だったのであろう。

しかしそれは、子が15歳未満頃までの言い分であって、すでに立派に成長している息子からの問いかけにも、きちんと向き合おうとしない態度は許されることではない。そのような母の言動によって、子自身の《出自を知る権利》は長いあいだ封印され、愛するユジンとは異母兄妹で結婚できない運命にあるとまで思い詰めさせ息子を苦しめた。さらにそれは、「小さかった私がおんぶしたパパの背中が広くて温かった」という思い出を持

っているユジンにとっても、亡き父への愛情と信頼にかかわる大問題であったにもかかわらず……。ときに親は残酷で身勝手なものでもあることを、カン・ミヒ像は教えている。

ところで話は戻るが、チュンサンはある日、交通事故で急死したと皆に伝えられ、突然ユジンはじめ同級生の目の前から姿を消してしまう。

10年の歳月が流れ、建築事務所で働くユジンの前に、チュンサンに生き写しの建築家イ・ミニョン（ペ・ヨンジュン＝2役）が現れた。その後のストーリーの展開に伴い、次第に事実関係が明らかになってゆく。

実は、チュンサンは交通事故により死亡したのではなく、記憶喪失となった。そのとき母ミヒのたつての依頼で主治医が別の人間ミニョンとしての記憶を植えた、というのだ。同時におそらくその頃、母ミヒは息子に父を与えるためにイ姓を名乗る人（ドラマには登場しない）と法的な結婚をしたのであろう。その際に戸籍も整理して、戸籍の上で婚外子のチュンサンは死亡とされ、婚内子（嫡出子）のイ・ミニョンをつくりあげた。オ・チェリン（パク・ソルミ）が依頼した興信所の担当者は、調査の結果チュンサンとミニョンが同一人物であることが明らかになったと伝えた際に、「このような戸籍の整理は、名字を変えるためにたまに行われます」と言うのだが、日本の戸籍制度では考えられない。これは、「直系血族入籍」（大韓民国民法784条1項、同戸籍法102条）を指しているのだろうか。今後の研究課題としたい。

その後、2度目の交通事故の衝撃により、ミニョンはチュンサンとしての記憶を断片的に回復する。意識が戻ると、「僕の父親は誰なの？」とふたたび母ミヒに尋ねはじめた。

ところで、数学のキム・ジヌ教授は、ユジンと幼馴染みで同級生の、しかもチュンサン&ミニョンと恋敵の関係にあるサンヒョク（パク・ヨンハ）の父にあたる。チヌはある時点からミヒの話には嘘があることを感じはじ

めていた。かつてチヌは、ヒヨンスとの初恋に破れて川に身を投じたミヒを救った際に、ミヒと性的関係を持ったことがあった。

ミニョンがチヌの前で倒れ救急車を呼んで病院まで付き添ったとき、チヌは決意し血液検査を受ける。それにより、ミニョン=チュンサンの父は自分であることを知る。そのことを医師から告げられたあとの《お父さん》になりきったチヌの眼差しが素晴らしい。

このドラマは、現実の様々なしがらみの中で悶々と悩む恋の姿を映し出しているところが、ヒューマニズムを求める気持と重なりあって、多くの人びとの心を捉えたと言えるだろう。

(2) AID (非配偶者間人工授精) により生を受けた子ども

「僕の父親は誰なの？」というチュンサンの問いかけを繰り返し聞いているうちに、この問題はAIDにより生まれた子の場合にも共通する重要で根源的なテーマだと強く感じはじめた。婚姻破綻との関係でも問題になりうる親子間の基本的な問題として、ここで取り上げたいと思う。

医療行為は、何らかの病気にかかったり怪我をした人に対して、その状態を回復させる目的で治療が行われるものである。ところがここに、きわめて例外的で不思議な治療行為がある。「不妊の治療」という名の下に一定の医療行為が行われてはいるが、不妊の原因を持っている人には直接何の治療行為もなされない。

結婚した夫婦に子が授からず、その原因が夫にあるとき、第三者（ドナー）から提供された精子によって妻が医療機関で人工授精を受けて妊娠し、子を得るAID（非配偶者間人工授精）がこれにあたる。この医療行為を受ける際には、夫の承諾が必要である。

慶応義塾大学病院が日本ではじめてAIDを行うようになってからの歴史は長く、すでに50年以上が経過し、その間に1万人以上の子どもが生まれ

ている。この子どもの法律上の父親は、子を生んだ母の夫であり、その夫婦間に生まれた子として戸籍はつくられている。しかし、子に生命を与え遺伝情報を伝えた生物学的父は、まぎれもなくドナーであるにもかかわらず、ここでも「私の父親は誰？」という子どもからの問いは長いこと封じられてきた。AIDにより生まれた子どもたちの《出自を知る権利》のことなど、はじめから不問に付されてきたという方が正確であろう。

国によっては、遺伝上の親を知ることができる制度を持っているところもある（1984年スウェーデン法）。しかし日本では、自分がAIDで生まれたことを知っている人の割合は少ない。また、AIDで生まれた子を持つ父親を対象にした調査でも、子どもに告知することを望まない人の方が圧倒的に多い。

最近の新聞報道によれば、AIDで生まれた子どもたちが近々、日本で初めて「子どもの会」を結成するという（朝日新聞04年9月21日）。会の呼びかけ人は、AIDで生まれ、たまたま知り合った男女2人である。男性（30歳）は1年半前に受けた血液検査をきっかけとして、自分がAIDにより生まれた子である事実を知り、自分は何者であるのかというアイデンティティにかかわる自己認識が崩れた気持になった。大学病院で精子を提供した元医学部学生たちを訪ね、父親探しを続けるという。

呼びかけ人となった女性（25歳）の場合、2年前に母親からその事実を告げられ、精神的に不安定になってカウンセリングに通うようになった。そこで同じ境遇の男性と出会い、悩みなどを語り合ううちに、気持ちが落ち着いてきたという。

日本では、親が子どもに告知していない場合がほとんどであり、偶然に知っても1人で苦しむしかなかった。会では悩みを共有して支えあうほか、遺伝上の親を知る権利の重要性を訴えてゆくということだ。

さらに呼びかけ人の男性は、次のように言う。

「途方にくれた自分たちのような思いを他の人たちにさせたくない。《出自を知る権利》の法制化に向けて国や世論に訴えてゆきたい。その他、AIDを子どもに告げたいという親の相談にも乗りたい」と。

すでに昨年（2003）4月、厚生労働省厚生科学審議会の生殖補助医療部会は、第三者（ドナー）から精子や卵子の提供を受けて生まれた子が15歳以上になれば、遺伝上の親の個人的情報を知ることができる《出自を知る権利》を認める報告書⁽¹⁵⁾をまとめている。しかし、この報告書をもとにした法案作成は難航しており、この問題に対する人びとの意識が反映していると言えよう。

（3）窪島誠一郎『父への手紙』と作家・水上勉

この（2004年）夏9月8日、作家・水上勉氏（1919～2004）の死去が報じられた。水上文学はかなり読んできたが、まず思い出すのは、『雁の寺』と『越後つついし親不知』である。前者については、水上氏が『雁の寺』で直木賞を受賞した1962年は、私が東京都立大学に入学した年にあたり、その後、舞台でも上演されていくつかの場面が印象に残っている。後者は、活字で読む前に映画の方を先に観たと思う。1964年に受講した「民法（親族・相続）」の講義の中で、担当の唄孝一教授が父親推定の規定（民法772条1・2項）と関連づけて、上映中の佐久間良子が熱演しているという映画『越後つついし親不知』⁽¹⁶⁾に言及されたのがきっかけとなり、早速先輩と観に行った。

その後、生き別れになっていた水上勉氏の息子が父を捜しあてた、という新聞の記事を見た。そのときの新聞は「捜しあてた父は水上勉氏、“孤児の一念” 戦災の空白を克服」と報じていた（朝日新聞1977年8月4日）。その記事の記憶があったので、数年後に窪島誠一郎著『父への手紙』⁽¹⁷⁾が出版されたとき、早速購入して読んだ。

窪島誠一郎氏は、1941（昭和16）年生まれで、現在その肩書きは「信濃デッサン館」「無言館」館主・作家である。彼はその著書の中で、靴修理屋を営む自分の両親に対しいつの頃からか血のつながりの上で漠然とした違和感を抱くようになり、血液型などにより生みの親ではなく養父母であることを知ったことなどを書いている。幼いときの養父母との葛藤を経て、ついに実父が作家の水上勉であることを知るにいたる。彼がその父との再会を果たしたのは1977年、35歳のときで、父は57歳になっていた。

水上勉氏は当時、戦争と生活苦の中で一緒に暮らしていた女性との間に1941年9月、男の子が生まれ、その子は凌と名づけられた。しかし病苦や召集令のこともあって息子を育てることができず、子どもをほしがっていた井の頭線明大前で靴修理屋を営む窪島夫妻に養子に出したという。水上凌から窪島誠一郎へ、子どもの氏名は変わった。水上氏に養子先は知らされておらず、その後、明大前近辺は1945年4月の大空襲で焼け野原になっているのでその子は死んだものと思っていた。それが奇跡的な再会となったのである。

自分に命を授け、遺伝情報を伝えた生物学上の父は誰なのか、どのような人なのか、その人柄や才能は？……という問題は、子が自己を形成し人格発達をしてゆくときの重要な要素である。《出自を知る権利》は、それゆえに子どもの人権の1つとして位置づけられなければならない。

結びに代えて

TVドラマの社会的影響力は大きい。小山内美江子脚本の「3年B組金八先生」シリーズにFTMの虎井まさ衛氏（著述業）をモデルとする鶴本直（上戸彩）が登場したことをきっかけに、性同一性障害（GID）への理解が急速に広がった感がある。今年7月からは「性同一性障害特例法⁽¹⁸⁾」が施行された。しかし、体の性別に心の（脳で感じる）性別が一致しない、

という人びとへの視線はまだ偏見に満ちている。

先日（9月7日）観たテレビ番組「福祉ネットワーク」（NHK③）に、婚姻破綻した母が2人の息子と暮らしているひとり親家族が登場した。通常と違う点は、母・水野淳子さんは戸籍の上では長男と記載されているMTFの人なのである。すでに子どものいる性同一性障害者は、この特例法で性別変更を申し立てることができない（同法3条1項3号）。自分の母（かつては父）から変更の申立ができないことを聞かされたとき、2人の子は即座に「僕たちは死ななくてはいけないの？」と尋ねたという。

生まれた子どもを配慮して設けたという条項により、現実には生きている子どもにそのような辛い思いをさせる法律であってはなるまい。子どものいないことを性別変更の条件としている条項を削除することは、緊急な課題である。

私たちの身の周りには、子どもの人権にかかわる問題が山積している。

注

- (1) アドルフ・ポルトマン著、高木正孝訳『人間はどこまで動物か——新しい人間像のために——』（岩波新書、1961年初版、2001年56刷）30、57～58ページ
- (2) 労働法学者・東京都立大学総長の沼田稲次郎氏が、国際児童年（1979年）の前年11月に行われた講演会の中で用いた言葉。なお、星野澄子「国際児童年と子どもの人権」（地方自治通信1979年2月号）でこの講演を紹介。現在は、国際人権規約で定められている権利を子ども（18歳未満）について敷衍した詳細な内容をもつ「子どもの権利条約」（正称：児童の権利に関する条約）（1994年5月22日発効）がある。その中では「できる限りその父母を知りかつその父母によって養育される権利を有する」（7条1項）と謳われている。
- (3) ヘレン・E・フィッシャー著、吉田利子訳『愛はなぜ終わるのか』（草思社、1993年）
- (4) 樋口一葉『大つごもり・十三夜』（岩波文庫・2004年）58ページ
- (5) 前掲書（4）60ページ
- (6) 前掲書（4）60～61ページ
- (7) 矢崎節夫『童謡詩人金子みすゞの生涯』（JULA・2003年）

- (8) 『別冊太陽―生誕100年記念金子みすゞ』(平凡社・2003年)
- (9) 前掲書 (8) 50ページ
- (10) 神奈川大学図書館主催『みすゞ』上映と講演会(02年6月12日)における五十嵐監督の言葉
- (11) 前掲書 (8) 133～134ページ
- (12) 『誰も知らない』(映画)を上演館にて鑑賞
- (13) 『愛の群像』(DVD-BOX I・II)演出:パク・ジョンイ 脚本:ノ・ヒギョン(1999年MBCテレビ放映)
- (14) 『冬のソナタ』(DVD-BOX I・II)制作・演出:ユン・ソクホ 音楽:イ・イム 脚本:キム・ウニ、ユン・ウンギョン(2002年KBSテレビ放映)
- (15) 『精子・卵子・胚の提供等による生殖補助医療制度の整備に関する報告書』(2003年4月28日)
- (16) 『越後つついし親不知』(1964年東映東京作品)監督:今井正 出演:佐久間良子、三国連太郎、小沢昭一
- (17) 窪島誠一郎『父への手紙』(筑摩書房、1981年)
- (18) 正称は、「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」(2003年7月16日法律第111号)